【原　著】

中学校部活動の参加とソーシャルスキルとの関連
―運動系部活動と文化系部活動の違いに注目して―

河村　明和 *

本研究では，部活動（運動部，文化部）に所属している生徒と，部活動に所属していない生徒を対象とし，部活動経験とソーシャルスキルの保持，活用との関連について検討を行うことを目的とした。さらに，部活動に積極的に参加している生徒のソーシャルスキル得点が，部活動に積極的ではない生徒と，部活動に所属していない生徒ではどのような違いが見られるかにおいても検討を行った。協力を得た中学校の生徒 241 名（男子 126 名，女子 115 名）を調査の対象とし，質問紙による回答，観察法を用いた第三者評価を行い，すべての項目に対し欠損値がない有効回答者 219 名（男子 118 名, 女子 101 名, 有効回答率 90.9%）を分析の対象とした。分析の結果から，運動部，文化部と，部活動に所属していない生徒との間で，ソーシャルスキル得点に有意な差は見られず，部活動への所属の有無からは，ソーシャルスキルの保持，活用に関連が見られなかった。しかし，部活動へのコミットメントが高い群, 部活動へのコミットメントが中低度の群（運動部, 文化部ともに第三者の観察から判断した）と，部活動に所属していない生徒との間において，ソーシャルスキル得点に一部有意な差が見られた。これにより部活動におけるコミットメントの度合が，ソーシャルスキルの保持，活用に一部関連している可能性が示唆された。

キーワード：中学生，ソーシャルスキル，コミットメント，文化部，運動部，観察法

【問題と目的】

近年の学校教育では，基礎的な学力の定着とともに，多様な文化が混在する現代社会において，生きる力の育成が求められている（文部科学省，2008：文部省，1998）。そして，この生きる力の内容に類似した概念として，資質・能力（コンピテンシー）が取り上げられている（中央教育審議会, 2005）。この資質･能力（コンピテンシー）とは，単なる知識や技能だけではなく，技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して特定の文脈の中で複雑な要求，課題に対応することができる力で，問題場面において活用できる思考力・判断力・表現力などの「認知的スキル」から，対人関係を調整して協同（協働）することができるなどの「社会的スキル」までが含まれた「問題解決につながる能力」であると定義されている（Rychen & Salganik，2003 立田監訳，2006）。

資質・能力は，実際にそれらを活用する経験を積んで獲得されるものであり，学校教育において，児童生徒たちに資質・能力を獲得させていくためには，児童生徒たちが解決すべき課題に向かって自由度の高い思考にもとづく試行錯誤を，他者との協同（協働）活動を通して, 自ら獲得することが求められるのである（河村，2017）。

しかし，いくら教員が熱心に授業をしたり学習環境を整えたりしても，学習者自身が積極的に学びに関与しなければ効果は上がらない。学習は学生の関与から始まる（Shulman, 2002）ものであり，アメリカでは NSSE（National Survey on Student Engagement）のような，学生関与に関する調査が行われている。その概略は，学生が大学のリソースや教室内外の学習機会，正課の授業，留学やサービスラーニングなどの準正課のプログラム，クラブやサークルなどの正課外の活動にどのくらいの時間や努力を投入して関与し，それによって自分の学びや成長につなげているか，逆に，大学がそのようなリソースや機会を提供することによって，ど

＊　早稲田大学大学院教育学研究科

のくらい学生の学びや成長にインパクトを与えられているか，を調査するものである。学生の関与とは，正課だけでなく準正課や正課外を含む教室内外の学習機会への学生の関与を意味しているのである。また，学生の関与は 2 つの重要な要素からなることを指摘している。第一の要素は，学生が，勉強や他の活動に投入する時間と努力の量である。第二の要素は，機関が，資源を配分し，学習の機会やサービスを組織する方法である。それによって，学生は正課，準正課，正課外の活動に参加し，そこから利益を得られるよう方向づけられるのである。この知見を日本の学校教育に沿って考えるならば，学校教育における生徒の資質・能力が育成される領域は，総合的な学習も含めた各教科などの授業場面，学級活動や行事などを含めた特別活動，そして 2008 年より他の教育領域との関連を求められている部活動（文部科学省，2008）などであり，そこに高い学習効果につながる環境やプログラムを設定し，生徒たちに質と量が伴った学習をどれだけ主体的に取り組ませることができるかが重要である。

このような中で，各教科の授業場面や特別活動に比べて，学習指導要領における部活動の位置づけは，歴史的経過からも，生徒が部活動に取り組むことにおける教育的な効果に関する実証的な報告は少ないのが現状である。その中でも部活動参加者と不参加者を比較した研究（山口・岡本・中山，2004；竹村・前原・小林，2007）において，部活動参加者は不参加者と比較して，スクール・モラールや授業満足感，友人と協力しながら課題を達成したいという協同性が高いことが明らかにされている。また，部活動への積極性が高いほど，その時期の学業コンピテンスや学校生活への満足度が高く，その後の学校生活満足度がより大きく伸びる可能性があること（角谷，2005），部活動に積極的な生徒は部活動に所属していない生徒に比べ，学校生活の諸領域や心理的適応の得点が高いこと（岡田，2009）などが明らかにされている。ただし一方では，運動部の生徒は反社会的傾向が強い（Lamborn, Brown, Mounts & Steinberg, 1992；岡田，2009）という指摘もあり，部活動の集団体験から生徒が学ぶものは，その部活動集団が建設的な状態にあればプラスの面が多いだろうが，集団の状態が不安定であったり，規範意識が低下していたりなど，所属する生徒たちに不満やストレスが高まっているときに，集団内の生徒たちの人間関係の相互作用はマイナス面が表出する可能性が高いことが考えられる。つまり，単に部活動に所属すれば期待される教育効果が得られるわけではないことに留意しなければならないのである。

さらに資質・能力は他者との協同（協働）活動を通して獲得されることが指摘されていることから，対人関係を形成する技術であるソーシャルスキルを，生徒たちがどの程度保持して活用しているかが，資質・能力の獲得の成果を左右すると考えられる。

ソーシャルスキルの知見は，学校教育の中では，学級集団における研究が見られる。河村・品田・小野寺（2008）は学級内での教育活動において，児童生徒にソーシャルスキルを学習させ，対人関係の体験学習を積み重ねることで学校や学級における諸問題の予防のみでなく，子どもたちがより積極的に他者とかかわる意欲や技術が形成されていくことを指摘している。また，小野寺・河村・武蔵・苅間澤（2003）によれば学級に対する満足度が高い生徒はソーシャルスキルの発揮も多いことが指摘されている。

しかしながら，部活動体験とソーシャルスキルとの関連についての知見は少ない。先行研究において，雨宮・上野・清水（2013）による大学生の部活動における適応感とソーシャルスキルの関連や，雫田（2014）による運動部経験がストレスコーピングスキルとソーシャルスキルに与える影響などがあるが，どちらも大学生を対象にしている知見であった。また，部活動の先行研究で得られている知見は，運動部におけるものがほとんどであり，文化部における研究はほとんど行われていないのが現状である。

そこで本研究では，学校教育において報告が少ない部活動の領域で，生徒が効果的に資質・能力を獲得する要因を検討するために，生徒の部活動経験とソーシャルスキルの保持・活用との関連について検討を行うことを目的とする。その際，運動系の活動を行っている部活動を運動部，非運動系の活動を行っている部活動を文化部と定義した。そして，運動部と同様に部と

して活動を行っているが，先行研究ではあまり知見が多く見られない文化部も，今回の研究対象とした。また，単に部活動の参加の有無だけではなく，部活動への参加状況について，第三者の視点から観察を行い，部活動における意欲や，コミットメント（関与）の度合を総合的に判断したものを本研究ではコミットメントとして併せて調査を行い，多面的な検討を行うこととする。

【方　法】

調査時期：201X 年 6 月中旬から 7 月にかけて質問紙による調査を実施した。調査時期に関しては，新学期に入学した 1 年生が部活動に慣れ，また，3 年生が部活動に所属している時期を考慮し，この時期に調査を実施した。

調査対象：A 県 B 市 C 中学校の生徒 241 名（男子 126 名，女子 115 名）を調査の対象とし，すべての項目に対し欠損値がない有効回答者 219 名（男子 118 名，女子 101 名，有効回答率 90.9%）を分析の対象とした。

測定用具：中学校を対象とした質問紙による調査を行った。測定尺度は河村（2001）が作成したソーシャルスキル尺度を用いた。この尺度は，学級生活で必要とされるソーシャルスキルにおいて，対人関係を営む上でのマナーにあたる配慮のスキルと，友だちと能動的にかかわるために必要なかかわりのスキルの二因子で構成されており，それぞれ 9 項目で測定される。項目における評定は 4 件法（1 :ほとんどしていない，2：あまりしていない，3 ：ときどきしている，4 ：いつもしている）であり，それぞれ単純加算により得点を算出するものである。

また，観察法による調査を行い，C 中学校にて生徒の部活動における平素の参加態度を第三者によって得点化した。得点化を行うにあたり，より客観的に生徒の様子を判断するための配慮から，1 年間を通して C 中学校に介入を行う学生ボランティア 2 名が，週に 1 回部活動を見学し，第三者の視点から観察を行った。そして，観察を行った学生ボランティア 2 名が話し合い，「生徒の部活動への参加態度（意欲，コミットメントの度合）は良かった」に対して，5 件法（1 ：全く当てはまらない，2 ：あまり当てはまらない，3 ：どちらともいえない，4 ：少し当てはまる，5 ：とても当てはまる）で回答し得点化を行った。

調査手続き：C 中学校長，学級担任に承諾を得た上で，学級ごとに質問紙による調査を実施した。調査を実施するにあたり，担任教員には同封されている実施の手順，注意事項のプリントに沿ってアンケートを実施することを依頼した。また，この調査は学校の成績に関係がないこと，回答は強制ではなく回答しなくても不利益を被らないこと，回答は担任教師を含め教職員に見られることなく，データ処理されること，個人のプライバシーは守られることをフェイスシートに明記し，調査参加者にも伝えるよう依頼した。そして，アンケートを回収する際は，回収用の封筒に生徒が回答したアンケートを入れ，その場で密封し，生徒に余計な不安を与えることがないように配慮した。以上の手続きを行った上で，学年，組，性別，出席番号の記入を求め，これらの情報を基にデータの照合を行い，統計処理を行った。なお統計処理には，IBM SPSS Statistics（Version24）を用いて分析を行い，有意水準は 5% 未満とした。

【結　果】

1．部活動所属（運動部，文化部），無所属とソーシャルスキル得点の比較

部活動所属の有無（以後，部活動に所属していない生徒を無所属とする）と，所属する部活動が運動部か文化部かの種別を独立変数とし，ソーシャルスキルの配慮とかかわりのスキルの得点を従属変数として，一要因分散分析および，Tukey 法による多重比較を行った（**Table 1**）。結果，配慮のスキルにおいてのみ，文化部は無所属に対して，有意傾向で得点が高かった。

2．運動部，文化部のコミットメントにおける高群，中低群，無所属とソーシャルスキル得点の比較

さらに，運動部，文化部に所属する生徒を観察者が行ったコミットメントの高低によって細分化し，運動

Table 1 部活動所属（運動部，文化部），無所属とソーシャルスキル得点の一要因分散分析

	運動部 (*n*=160)	文化部 (*n*=40)	無所属 (*n*=19)	*F* 値		多重比較
配慮	32.71	33.82	31.21	2.89	†	文化部＞無所属
	(4.19)	(2.92)	(4.01)			
かかわり	29.91	29.02	29.95	0.39	*n.s.*	
	(5.90)	(5.57)	(5.86)			

上段：平均点　下段：標準偏差　† $p<.10$.

Table 2　部活動におけるコミットメント高群，中低群，無所属とソーシャルスキル得点の一要因分散分析

	運動部高群 (*n*=47)	運動部中低群 (*n*=113)	文化部高群 (*n*=19)	文化部中低群 (*n*=21)	無所属 (*n*=19)	*F* 値		多重比較
配慮	34.26	32.07	34.95	32.81	31.21	4.93	**	運動部高群, 文化部高群＞運動部中低群, 無所属
	(2.47)	(4.58)	(1.35)	(3.56)	(4.01)			
かかわり	31.68	29.19	30.95	27.29	29.95	2.79	*	運動部高群＞文化部中低群
	(3.59)	(6.50)	(4.25)	(6.13)	(5.86)			

上段：平均点　下段：標準偏差　**$p<.01$,*$p<.05$.

部，文化部それぞれの高群（以後，運動部高群，文化部高群とする），中低群（以後，運動部中低群，文化部中低群），そして部活動に所属していない生徒（無所属）とカテゴライズして独立変数とし，ソーシャルスキルの配慮とかかわりのスキルの得点を従属変数として，一要因分散分析および，Tukey 法による多重比較を行った（**Table 2**）。

結果，配慮のスキルにおいて，運動部高群，文化部高群と，運動部中低群，無所属との間に有意な差が見られ（配慮のスキル F（4,214）＝4.93，$p<.01$），運動部高群，文化部高群が運動部中低群と無所属より配慮のスキルの得点が有意に高かった。また，かかわりのスキルにおいて，運動部高群と文化部中低群との間に有意な差が見られ（かかわりのスキル F（4,214）＝2.79，$p<.05$），運動部高群が文化部中低群よりかかわりのスキルの得点が有意に高かった。

【考　察】

本調査の結果 1，2 より，配慮のスキルにおいて，運動部，文化部と，無所属との間に有意な差はなく，その生徒がどの程度積極的に部活動にコミットメントしているかによって配慮のスキルの保持・活用に差が認められることが一部有意に示唆された。一方で，かかわりのスキルにおいては，運動部，文化部におけるそれぞれの高群と中低群，また無所属との間に有意な差は見られず，それぞれの部活動におけるコミットメントの違いによる影響が明確には見られなかった。これは，かかわりのスキルが発揮される上では，環境的な要因による影響があるためではないかと考えられる。本研究において使用したソーシャルスキル尺度は，学級においてのソーシャルスキルを測定するため，磯部・堀江・前田（2004）の親和動機が低い場合は，ソーシャルスキルを使用しないという知見から，学級集団が良好ではない状態であると生徒がスキルを保持していても，それを発揮しないことがあると考えられた。

以上のことから，部活動体験によるソーシャルスキルの保持，活用との関連は運動部，文化部の違いによらないことが一部示唆された。また，部活動への所属の有無ではなく，運動部，文化部にかかわらず，部活動にどの程度コミットメントしているかが，ソーシャルスキルの保持，活用に関連していることも一部示唆された。

これは，学生の知識獲得や一般的な認知発達のレベ

ルが大きくなるのは，学業や大学でのアカデミックな経験に対する学生の関与の大きさに比例するとの先行研究の知見（Pascarella, &Terenzini, 1991）から解釈することができる。関与とは，学生が効果的な教育実践とみなされるような活動にひんぱんに参加することと定義され，そのような活動に投入する時間と努力の量である。そして，高い動機づけを持ち熱中していても，それが結果的に学習につながらなければ無意味であるし，アクティブに学習していてもいやいや取り組んでいるのでは関与していることにはならないということで，動機づけとアクティブラーニングの両方が結びつくとき学生の関与が促されることが指摘されている（Bowen, 2005）。アクティブラーニングとは，一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動型）学習を乗り越える意味での，あらゆる能動的な学習のことであり，学習者の関与が重要な要素であることが指摘されている（溝上，2014）。この場合の関与も物事にかかわることであり，アクティブラーニングも学習者が自ら能動的に学習課程に関与することが求められるのである。さらに，関与には動機づけが大切で，期待（この課題は自分にできそうか）と価値（この課題はやる価値があるか）の両方が満たされることが必要であり，学習活動の質（学習活動の内容，学習者同士のかかわり方，学習環境など）も影響を与えることが指摘されている（河村，2017）。つまり，部活動におけるコミットメントの度合が高いとされた生徒は，部活動での取り組みに高い関与があったと考えられ，能動的に他の部員とかかわり，また能動的な学習による思考から，学級の友人に対する考え方とも関連があり，ソーシャルスキルの保持・活用も高くなっていると考えられるのである。

部活動は中学生にとって重要な人間関係形成の場であり，部活動の集団が（運動部か文化部かによらず）そのような場を提供する役割を果たす（角谷・無藤，2001）という作用が生まれるのは，生徒の所属している集団が，その生徒にとってどのような集団かが重要であり，これは狩野（1994）が提言している準拠集団という考え方により解釈をすることができる。準拠集団とは個人がある集団に心理的に結びつきを持ち，その集団の規範に同調しているとき，その場合の集団をさしていうのである。つまり，部活動集団が生徒にとって準拠集団となっているということは，生徒はその部活動集団での活動に「価値」を見出し，親和的な関係の他の部員とのかかわりの中で「期待」も高まっていることが想定されるのである。その結果として，部活動に高い関与が生まれ，一定の教育成果を獲得していることが推測されるのである。

つまり，部活動を通してソーシャルスキルを身に付け活用するためには，生徒はただ部活動集団に参加していればよいのではなく，部活動集団が準拠集団となり，その準拠集団となった集団の中で他の部員と能動的な交流がある関与がなされたとき，ソーシャルスキルの保持や活用との関連が生じると考えられるのである。

よって，本研究の意義として以下の三点が考えられる。まず一点目として，先行研究では扱われていない中学生の部活動体験とソーシャルスキルとの関連を一部示唆することができた点。二点目は，部活動研究においてあまり取り上げられていない，文化部も調査の対象とし，運動部同様，文化部においてもソーシャルスキルの保持，活用に見られるような，一部の教育的効果への示唆ができた点。三点目として，中学校における部活動への所属の有無のみでの関連と，生徒の部活動へのコミットメントの程度を第三者の視点から評価を行った点である。この三点より，今後の学校教育における生徒の資質・能力が育成される領域として，部活動が運動部，文化部にかかわらず，教育的な取り組みの場となる可能性を示唆した点において意義があると考えられる。

しかし，本調査ではサンプルが A 県 B 市 C 中学校 1 校だけであり，地域の特色，学校の雰囲気など環境的な要因による可能性を排斥できない点において限界がある。また，本調査において，運動部，文化部によらず，部活動に積極的に関与することがソーシャルスキルの保持と活用に寄与するとの示唆を得ることができたが，そのメカニズムを明らかにするまでには至っていない。加えて，親和動機が低い場合は，ソーシャルスキルを使用しない（磯部・堀江・前田，2004）こ

とや，部活動集団において，高い積極性を持って取り組んでいる部員が多くの比率を占める部に所属する生徒は，高い学校適応を示している（林川，2015）など，部活動の集団ごとの雰囲気や集団凝集性における影響について調査・検討を行うことができなかった。さらには，部活動顧問の指導性など，部活動が行われる環境的要因に対してのアプローチを行うことはできなかった。以上のことを検討することによって，より教育現場に参考となる知見がもたらされることになると考えられる。今後の課題としたい。

【引用文献】

雨宮 怜・上野雄己・清水安夫（2013）．大学生運動部員版部活動適応感尺度の開発－部活動内対人交流場面におけるソーシャルスキルとの関連性の検討 学校メンタルヘルス，**16**，170-181.

中央教育審議会（2005）．初等中等教育分科会 教育課程部会（第 27 回（第 3 期第 13 回））議事録・配付資料［資料 4 － 1］

Bowen，S.（2005）．E*ngaged learning: Are we all on the same page?* Peer Review，**7**，4-7.

林川友貴（2015）．中学生の学校適応メカニズムの実証的検討 学級と部活動に着目して 教育社会学研究，**97**，5-24.

磯部美良・堀江健太郎・前田健一（2004）．非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係 カウンセリング研究，**37**，15-22.

狩野素朗（1994）．集団成員性の階層構造と凝集力 九州大学教育学部紀要 教育心理学部門，**39**，1-6.

河村茂雄（2001）．ソーシャル・スキルに問題がみられる児童・生徒の検討 岩手大学教育学部研究年報，**61**，77-88.

河村茂雄（2017）．アクティブラーニングを成功させる学級づくり「自ら学ぶ力」を着実に高める学習環境づくりとは　誠信書房

河村茂雄・品田笑子・小野寺正己（2008）．いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル中学校 図書文化社

Lamborn, S. D., Brown, B. B., Mounts, N. S., & Steinberg, L.（1992）．Putting school in perspective: The influence of family, peers, extracurricular participation, and part-time work on academic engagement.In F. M. Newman（Eds.）, *Student engagement and achievement in American secondary schools*. New York: Teachers College Press.

溝上慎一（2014）．アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換　東信堂

文部科学省（2008）．中学校学習指導要領

文部省（1998）．小・中学校学習指導要領

岡田有司（2009）．部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響－部活動のタイプ・積極性に着目して－ 教育心理学研究，**57**，419-431.

小野寺正己・河村茂雄・武蔵由佳・苅間澤勇人（2003）．中学生の援助レベルの理解と対応―ソーシャル・スキルの視点から カウンセリング研究，**36(1)**，31-37.

Pascarella, E., & Terenzini, P.（1991）. *How college affects students*. San Francisco. CA:Jossey-Bass.

Rychen, D. S. & Salganik, L. H.（Eds.）(2003)．*Key competencies for a successful life and wellfunctioning society. Gottingen*, Germany: Hogrefe & Huber.（立田慶裕（監訳）(2006)．キー・コンピテンシー：国際標準の学力をめざして　明石書店）

Shulman, L. S.（2002）. Making differences: A table of learning. *Change*. **34**, 36-44.

雫田英理（2014）．運動部活動経験がストレスコーピングスキルとソーシャルスキルに与える影響 人間科学研究 , **27**, 121-121.

角谷詩識（2005）．部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか : 学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから　発達心理学研究，**16**，26-35.

角谷詩織・無藤隆（2001）．部活動継続者にとっての中学部活動の意義 充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて 心理学研究，**72**，79-86.

竹村明子・前原武子・小林 稔（2007）．高校生におけ

るスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係 教育心理学研究，**55**，1-10.
山口正二・岡本貴行・中山 洋（2004）．高等学校における部活動への参加と学校適応度との関連性に関する研究―学校類型の視点より カウンセリング研究，**37**，232-240.

（2017 年 5 月 31 日受稿，2017 年 9 月 25 日受理）

Relations between Commitment to Club Activities and Social Skills among Junior High School Students: Comparison of Sports and Non-sports Club Activity Members

Akikazu Kawamura (Graduate School of Education, Waseda University)

The purpose of this study was to examine relations among students'experience of club activities and their attainment and use of social skills. The participants of a survey included both with and without club activity membership so that the study also examined differences in social skills among those who were active members, non-active members and non-members. The survey was given to 241 junior high school students (M:126, F:115) with their club activity observations by the third persons, and the data of 219 students (M:118, F:101, response rate 90.9%) were used for analysis. The results showed no significant differences in social skills scores among sports club members, non-sports club members and non-members, and club membership did not make a difference in terms of social skills attainment and use. On the other hand, in some areas significant differences in social skills scores exist among committed club members, non-committed members and non-members (the judgment of commitment in sports/non-sports club activities was by the third person observations). The study discussed possibilities of partial relations among social skills attainment, use and the degree of club activity commitment.

Keywords: junior high school students, social skills, commitment, sports club, non-sports club, observations